

N2

問題13 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

私は食べ物については好き嫌いが多いが、研究テーマや人間関係についてはあまり好き嫌いがない。ところが、いろいろな人と話をしていると、意外に好き嫌いがあるという人が多い。この研究は嫌いとか、この人は好きじゃないとかよく耳にする。しかし、どんな研究にも視点を変えれば学ぶところは必ずあるし、人間も同様に、悪い面もあればいい面もある。やって損をするという研究は非常にまれであるし、つきあって損をするという人間も非常に少ない。

科学者や技術者であるなら、発見につながるあらゆる可能性にアンテナを伸ばすべきで、そのためには、好き嫌いがあってはいけないように思う。研究の幅や、発見につながる可能性を大きく狭めてしまう。

ところで、そもそも好き嫌いとは何だろうか?

自分の研究分野は、理系であることには間違いはない。しかし自分でも、理由があって理系の道を選んだとは思えない。単なる偶然の積み重なりの結果なのだ。

「自分の好みや得手不得手で選んだ」とあとから言うのは、その偶然の選択に何らかの理由を与えないと、あとで悔やむことになるからだと思う。たとえば、理系の道を選んで思ったような成果を上げられなかったとき、「なぜ文系の道を選ばなかったのか」と思うような後悔である。遠い過去にさかのぼっていちいち後悔しては、その時点の目の前の問題に力を注げず、前向きに生きていくことはできない。

そう考えると、好き嫌いや感情というものは、偶然の積み重なりで進んでいく人生を自分なりに納得するためにあるようなものと言えるのではないか。好き嫌いや感情は、無意識のうちに、自分を守るために、自分を納得させるために、都合よく持つものなのだろう。

感情や好き嫌いは元来人間に備わっているものであるというのは間違いはないが、人間は、十分な理由がないまま行った自らの行動を、納得し、正当化するためにも、感情や好き嫌いを用いる。人間は、他の動物にはない、そんな感情や好き嫌いの利用方法を身につけているのかもしれない。

(石黒浩『ロボットとは何か一人の心を映す鏡』講談社による)

(注1) 狭める：狭くする

- (注2) そもそも：もともと  
(注3) 得手不得手<sup>てふえて</sup>：得意不得意  
(注4) 元来：初めから  
(注5) 正当化<sup>せいとうか</sup>する：ここでは、間違っていなかったと思う

71 好き嫌いがあつてはいけないと筆者が考えているのはなぜか。

- 1 どんな研究であっても、役に立つ新しい発見につながられるから
- 2 どんなことでも、自分の研究に役立つものがあるかもしれないから
- 3 好き嫌いで判断することによって、悪い面に気づきにくくなるから
- 4 嫌いなことには、自分が気づかない重要なことが隠されているから

72 筆者は、どうして理系に進んだのか。

- 1 文系が得意ではなかったから
- 2 自分の気持ちに従ったから
- 3 特に嫌いではなかったから
- 4 たまたまそうなったから

73 筆者は、好き嫌いとは人間にとってどのようなものだと考えているか。

- 1 自分がこれからとる行動を決める時のきっかけになるもの
- 2 自分が前向き<sup>まえむ</sup>に生きていくために意識的に利用しているもの
- 3 自分の研究や仕事がうまくいくように普段は抑<sup>おさ</sup>えているもの
- 4 自分の行動や選択<sup>せんたく</sup>が間違っていなかったと思うために用いるもの

N1

問題10 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

我が身が生涯に望み、知りうることは、世界中を旅行しようと、何をしようと、小さい。あきれるくらい小さいのだが、この小ささに耐えていかなければ、学問はただの大風呂敷(注1)になる。言葉の風呂敷風呂敷はいくらでも広げられるから、そうやっているうちに自分は世界的に考えている、そのなかに世界のすべてを包める、そんな錯覚に捕らえられる。木でいい家を建てる大工とか、米や野菜を立派に育てる農夫①とかは、そういうことにはならない。世界的に木を削ったり、世界標準の稲を育てたりはできないから、彼らはみな、自分の仕事において賢明である。我が身ひとつの能力でできることを知り抜いている。学問をすること、書物に学ぶことは、ほんとうはこれと少しも変わりはない。なぜなら、そうしたことはみな、我が身ひとつが天地の間でしっかりと生きることだからだ。

人は世界的にももの考えることなどはできない。それは錯覚であり、空想であり、愚かな思い上がりである。ただし、天地に向かって我が身を開いていることならできる。我が身ひとつでももの考え、ものを作っているほどの人間なら、それがどういう意味合いのことかは、もちろん知っている。人は誰でも自分の気質を背負って生まれる。学問する人にとって、この気質は、農夫のうふに与えられる土壌のようなものである。土壌は天地に開かれていなければ、ひからびて不毛になる。(注2)

与えられたこの土を耕し、水を引き、苗を植える。苗がみずから育つのを、毎日助ける。苗とともに、自分のなかで何かが育つを感じながら。学問や思想もまた、人の気質に植えられた苗のように育つしかないのではないか。子供は、勉強して自分の気質という土を耕し、水を引き、もらった苗を、書物の言葉を植えるのである。それは、子供自身が何とかやってみるほかはなく、そうやってこそ、子供は学ばれる書物とともに育つことができる。子供が勉強をするのは、自分の気質という土壌から、やがて実る精神の作物を育てるためである。「教養」とは、元来この作物を指して言うのであって、物識りたちの大風呂敷(注3)を指して言うのではない。

(前田英樹『独学の精神』筑摩書房による)

(注1) 大風呂敷おおぶろしき：実際より大きく見せたり言ったりすること

(注2) ひからびて：乾ききって

(注3) 物識り<sup>ものし</sup>：物事をよく知っている人

58 ① そんな錯覚に捕らえられるとはどういう意味か。

- 1 自分は何でも知っていて世界を相手にできると思う。
- 2 言葉でどんなことでも伝えられるような気になる。
- 3 学問から得られることには限界がないと感じてしまう。
- 4 人間が世界から学べることはいかに大きいことかと思う。

59 ② これとは何を指すか。

- 1 自分にできることを把握したうえで仕事をする
- 2 自分が世界のために何ができるかを考えて仕事に励む
- 3 できる限り多くの知識を得て自分の仕事に役立たせる
- 4 人のためにできることは何かを考えようとして仕事をする

60 この文章では、学問をするということをどのような例を使って説明しているか。

- 1 与えられた土を耕し、よい苗を選んで植える。
- 2 与えられた土を耕し、よい作物になるように苗を育てる。
- 3 与えられた土壌を改善するために耕し続ける。
- 4 与えられた土壌を改善しながら世界標準の作物を育てる。

61 筆者は「教養」をどのようなものだと考えているか。

- 1 新たな気質を見いだすことができる学問や思想
- 2 人それぞれの気質の中で育<sup>はぐ</sup>まれた学問や思想
- 3 生きていくうえで必要な専門的な知識
- 4 書物や学問から得られた多くの知識